五體清文鑑

一　前書き

（圖版第一四圖　參照）

作明治四十五年四月、自分は京都文科大學の命によつて、內藤教授、富岡講師と共に、滿洲奉天に出張して、其の宮城內に藏する所の古書の調査に從事した、滿文老檔、禮部志稿など貴重な史料が我が國に傳へられて、明清時代の歷史に新たに光明を添え得るやうになつたのは、此の行の結果であつたが、同時に五體清文鑑を寫眞する機會をも得て、其の全部を將來することが出來た、極めて短時日の間に此等の大部の書物を或は寫眞し、或は筆寫せしめたことであるからして、其の作業の間には隨分苦心もあり、困難にも遭遇した、始終の有樣は既に內藤教授が中央公論（第廿七年第十號）で發表せられて居る通りである、歸つて後は此等の寫眞の整理卽ち一萬枚近くの乾板の水洗、燒き付け、其の檢閱、貼り付け、裝訂と順序を追ふての整理の間に、炎暑酷寒の期を過ごして、丁度一年を經過した三月の末つ方に、初めて悉皆製本を終つて、研究室の架上を賑はすことゝなつた、かくして出來上つた幾十册の書物に對して、昨年以來引き續いての經過を顧ると、多少の感慨を禁じ得ないと同時に、更にまた原著者の苦心に對して甚深の敬意を捧げなければならぬ、まだ纔かに整理を終つた位のことで、自分の目ざして居る五體清文鑑についても、一向研究の範圍には入つて居ないのであるが、とにかく此の書の大體の解題を草して、同學の士に頒ちた